

学生部セミナー

—「環境と生命」について—

田村 卓

I はじめに

「……後から思えば、運命はその時1段もはずせないハシゴだった。どの場面をはずしても登りきることはできない。そして、はずすことの方がよほどたやすかった。多分それでも私を動かしていたのは、死にかけた心の中にある小さな光だった。そんなものはない方がよく眠れると私が思っていた闇の中の輝きだった。」(吉本ばなな著『キッチン』より)

学生部セミナー「環境と生命」の企画・運営に携わりながら、私はよくこんな気持ちになります。まがりなりにも「課外教育プログラム」と銘打った企画の主催側が参加者にメッセージを伝える前にこんな気持ちになってしまうことがよいことなのか悪いことなのかわかりませんが、現代(いま)を生きる一個の人間として感じ考えることからしか、この企画は始まらなかったし、続いてこなかったと思うのです。

1986年4月のチェルノブイリ原子力発電所の事故をきっかけに2年間の準備期間を経てスタートしたこのセミナーは、今年で7年目。間に1年間の休

止期間を置いたのでこれまでに計6回の通年プログラムを展開したことになります。放射能による汚染が自分たちだけでなく、これから生きる次の世代にまで及ぶという事実に対する驚きは、「近代」という時代と社会の構造が再生産し続ける問題の“系”の想像を絶する深さと拡がりについての認識へと発展し、さらにその終末的状況から照り返される不思議な輝き(注1)の方へ向けた生き方の模索に到達しました。「私たちが、地球上の様々な『いのち』と共に支え合い、共に生きることを考えよう」(1995年度セミナーパンフレットより)と平易に書かれたセミナーの企画趣旨。単に耳当たりのよい情報として気持ち良く消費される類のものとしてではなく、「一人ひとりがどのように各々の『人間』を生きるのかという問いと共にあろう」という呼びかけとしてこれを理解してほしい……。そんな思いでこのセミナーの企画・運営は続けられてきたと言えます。

II プログラム

学生部セミナー「環境と生命」のプ

プログラムは、主に講演会、映画上映会、そして夏休み期間中に山形県の高畠町で行われるフィールドワーク農業体験によって構成されます。年度によっては、一人芝居の鑑賞や丸木美術館見学、それに東京都のゴミ処理場の見学などがこれに加わったこともあります（資料―「プログラムの例」参照）。

プログラム立案の際の基本的な理念の第一は、前述したセミナーとしての呼びかけに添う視点を持った人や表現や現場に、とにかくまず出会ってみたいということ。前述したように、環境問題は「近代」という時代と社会の構造が再生産し続ける問題の“系”としてとらえることができます。果てしない深さと広がりを持つこの問題の“系”に、まず事実として出会ってほしい。そしてその事実が、私たちの「少しでも豊かに、少しでも便利に暮らしたい」という日々のささやかな願いの上に築き上げられてきたということに気付いてもらいたいということです。

基本理念の第二は、その“出会い”の意味を、身体レベルで考えてほしいということです。「身体レベルで」というのは「生活レベルで」と言い換えてもいいし、「現場感覚で」と言い換えてもいいと思います。つまり、出会った事実を単なる観念的な思考の材料として終わらせることなく、あくまで自らの生活との関連のなかでとらえ、考えてほしい。生活のなかには、当然のことながら自分と関係を持つ生

身の人間がいますし、もう少し想像力を働かせれば人間を含んだ生命の“系”が存在します。出会った事実自らをも含んだ生命の“系”を重ね合わせ、そこに浮かび上がる像を五感フル動員で感じてほしい、身体で考えてほしいということです。

基本理念の第三は、前述―Iとも重なりますが、「その“出会い”と共に生きよう」という呼びかけであると思っています。いくらそれが私たち一人ひとりにとって大切な問題であるとはいっても、問題の重さ故に「できることならば見なかったことにしてもらいたい」といったような思いを募らせてしまうのはある意味で自然であるとも言えますし、感じやすい、やさしい人ほど自らのそんな思いと問題の重要さとの間で悩んでしまう……。学生部セミナー「環境と生命」は、そのことを承知で「“出会い”と共に生きよう」と呼びかけます。その意味でこのセミナーは、人間としての倫理・哲学までを含んだトータルな生命に対する問いかけであると思います。

III 学生の学び

前述―IIに述べたようなプログラムのなかで、参加した多くの学生は戸惑い、悩みます。しかし、「参加しない方がよかった」というような声はほとんど聞かれません。

プログラムのなかで学生たちが出会うのは、放射能に汚染された人々であり、その日に食べるものもない貧困で

あり、一本の木も生えていない剥げ山であり、悪臭が鼻をつくゴミの山であり、農作物の育たない砂漠化した土地であり、農薬や添加物にまみれた食物であり、オゾン層に大きく口を開けたオゾンホールであり、ダイオキシンの汚染され生まれてきた先天性異常児であり、海を奪われ、身体を自由を奪われ、ムラの生活を奪われた水俣病患者の漁師であり、私たちの生活と密接に関係しながら、私たちの知らないところで傷つけられ切り捨てられるたくさんの生命たちの現実です。そしてそれらが全て、私たち一人ひとりを含む問題の“系”として存在しているという事実です。戸惑わない訳がありません。そんな状況のなかで、学生たちは、それでも“何か”をつかもうとします。目の前にした現実を直視し、それが自分たちの現実であることを認め、その現実についてどのようなスタンスをとればいいのかを一生懸命に模索しようとします。

確かにそれは、楽な作業ではありません。ただ、ここに一つの重要なキーが用意されます。それは、問題の噴出する現場にあって、わずかな可能性を信じ、誇りを持ってしたたかに生きる人であり、その生き方です。学生はそうした人の生き方と、自分自身の生き方と、自分自身の現実とを二重写し・三重写しにしながら、またそれらの境界を行ったり来たりしながら、自分について、人について、社会の現実について、またそれらの関係について、そ

して環境／生命の系についての問いかけを始めます。

「問いかけ」方が様々なように、それに対する答え方も実に様々ですが、そのなかに共通点を見出せるとすれば、問いかけの過程で学生たちは孤独ではない、孤立してはいないということではないかと思います。学生たちが「現場」で出会う様々な人々、その生き方が彼／彼女たちの隣にいます。その目は厳しいと同時にやさしく、哀しげであると同時に実に生き生きと輝きます。“自己決定”と“共生”の各領域が絶妙のバランスをもってそこに現出するので。

このセミナーに「スタッフ冥利」というものがあるとすれば、これがその瞬間です。と同時に、それは「人間」としての自らを今度は学生たちから問い返される瞬間でもあります。

「あなたはこの現実の中であなた自身の『人間』をどのように生きようとするのか。」

学生たちから問い返されるその問いかけを自らに課して、私たちスタッフは次年度プログラムの検討に入ります。

IV おわりに

以上、学生部セミナー「環境と生命」の概要について述べて参りました。

見方によっては、かなり手前味噌な部分もあったように思いますが、このセミナーを担ってこられた諸先輩方の思いにささえられるような格好でここまで筆を進めてきました。

私たちの社会の持つ基本的なベクトルをある程度正確に把握すれば、私たちを取り巻く様々な問題が本質的な意味で解決することの可能性が、少なくとも現時点において如何に低いかは言を待たないところです。そういった意味で、学生部セミナー「環境と生命」の存在意義は当分の間継続することになると思います。人事異動によるメンバー交代、企画のマンネリ化、業務量の増大など、大学の一行政部門である学生部がこうした性格の企画を担い続けることには、当然、様々な困難が伴います。しかし問題が存在する以上、そしてそれらが私たち一人ひとりを取り巻く“系”としてある以上、また大学が教育機関として学生に「よりよく各々の『人間』を生きる」ことを考える機会を提供しようとする以上、やめる理由は考えられません（注2）。

冒頭に掲げた思いを引きずりながら、それでも「現場」に出会う度に何だか元気になりながら、助言・協力してくださるたくさんの先生方に感謝しながら、そして学生たちのまっすぐな眼差しとしなやかな感性に励まされながら、どうにかこうにかでも続けていきたい……。そんなふうに思うのです。

以上

注1：石牟礼道子はこれを「苦海浄土」と呼び、田中正造は「地獄の桃源」という言葉でこれを表現しました。

注2：誤解を恐れずに言えば、やめる理由はなくとも、やめるという選択はあり得ます。参加者各自の自主性を尊重するプログラムであるだけに、その存続についても自己決定性を失ってはならないと思うからです。

（学生部 職員）

資料一 「プログラムの例」

'92年度学生部セミナー『環境と生命IV』年間スケジュール

日 程	プログラム	内 容	時間・場所
4月23日(木)	16mmフィルム	『チェルノブイリ黙示録』(1990年ソビエト映画) 1986年4月26日モスクワの南、チェルノブイリでは放射能が人々に降りかかっていた……。あれから6年、子供たちに春は訪れるのか……。	17:00～18:10 9号館大教室
5月12日(水)	講演会	講師 大石 武一氏 (初代環境庁長官、緑の地球防衛基金会長) 進行 鈴木 正男 一般教育部教授 初代環境庁長官就任以来20年、これまで環境保護活動について、体験をもとに語っていただく。	17:00～19:30 9号館大教室
5月25日(月)	一人芝居	『人生一発勝負』 演者 愚安亭 遊佐氏 時代の波に揺さぶられながら生きてきた下北の漁師の生活を、下北弁にのせて演じ語っていただく。	17:00～19:30 ウィリアムズホール 4階スタジオ
6月11日(木)	講演会	講師 Renate HEROLD 氏 (新聞記者、外務省研修所講師) 進行 大森 真紀 経済学部教授 ドイツ人から見た日本人の生き方、環境問題の関わり方を比較し、「本当の豊かさ」を問いただす。	17:00～19:30 9号館大教室
6月17日(水)	ビデオ上映会	『木を植えた男』 旅で出会った老人は、日々木の苗を植え続けた。何年かして再訪すると、ハゲ山は住民に安らぎを与える森に変わり、老人はなおも木を植えていた。	12:20～13:00 5321教室
6月27日(土)	美術館見学	『丸木美術館』(埼玉県東松山市) 画家丸木位里・俊夫妻の絵画を見ながら「平和」や「いのち」について考えてみませんか。	詳細は後日掲示板で お知らせします。
9月3日(木) ～10日(木)	フィールドワーク	『夏季フィールドワーク農業体験 in 山形県高島町』 地域ぐるみで無農薬農業に取り組んでいる高島町の人々の生活、土と仲良くする一週間。	詳細は後日掲示板で お知らせします。
10月2日(金)	ビデオ上映会	『エチオピアの鼓動』(岩波映画) など 干ばつによる飢饉を招きがちな村で、植林・農業・給水・保健など総合的な地域復興促進活動に現地の人々と共に取り組む姿を記録した映画	17:00～18:30 9号館大教室
10月8日(木)	講演会	講師 林 達雄氏 (日本国際ボランティアセンター事務局長) 進行 郭 洋春 経済学部講師 アジア・アフリカでの体験をもとに、これからの日本人の進むべき新しい生き方について話をさせていただきます。	17:00～19:30 9号館大教室
11月6日(金)	ゴミ処理場見学	東京港中央防波堤外側処分場 集められたゴミが最終的に捨てられている所を見たり処分の方法について行政側の話を聞きます。	詳細は後日掲示板で お知らせします。

1995年度 学生部セミナー『環境と生命VI』年間スケジュール

日 程	プログラム	内 容	時間・場所 (予定)
4月20日(休)	講 演 会	<p>講師 最首 悟氏 進行 西平 直 (学校社会教育講座助教授) 水俣からは世の中のしくみがよく見える。水俣病は特定の地域に起きた過去のできごとではなく、私たちに一人ひとりのあり方を問いかける鏡なのである。</p>	17:00~19:30 9号館大教室
4月25日(火)	ビデオ上映会	<p>『水俣病=その20年=』(1976年) 監督 土本 典昭 制作 育林舎・シグロ 水俣病は終わっていない。環境汚染も水俣の人々の歴史も残されている。水俣の人々と閉ざされた海・不知火海を描く。</p>	17:00~19:00 9号館大教室
5月8日(月)	講 演 会	<p>講師 浜元 二徳氏 進行 栗原 彬 (法学部教授) 原因不明の「奇病」発病、生活苦、差別、両親の死、悪化していく病状…どれをとっても悲惨としか言いがたない状況の中で生きてこられた患者さんからのメッセージ。</p>	17:00~19:30 9号館大教室
6月6日(火)	ビデオ上映会	<p>『阿賀に生きる』(1992年) 監督 佐藤 真 制作 阿賀に生きる制作委員会 新潟水俣病(第二水俣病)発生の地である「阿賀野川」。そこで自分の仕事と生きざまに誇りを持ちつつ、生きる人々を描く。</p>	17:00~19:00 9号館大教室
6月13日(火)	講 演 会	<p>講師 佐藤 真氏 進行 金子 啓一 (文学部助教授) 映画「阿賀に生きる」撮影にあたり、新潟水俣病の現場、阿賀野川で過ごした3年間で、その土地とそこに生きる人々の姿から見たものは何か。</p>	17:00~19:30 9号館大教室
9月中旬 (予定)	フィールドワーク	<p>『夏季フィールドワーク農業体験 in 山形県高島町』 地域ぐるみで有機農業に取り組んでいる高島町の人々と生活し、土と仲良くする一週間。自然との共生を体で感じ、考える。(7泊8日)</p>	詳細は後日掲示板でお知らせします。
11月13日(月)	講 演 会	<p>講師 村井 吉敬氏 進行 岡田 憲治 (法学部助手) 私たちの口にする輸入食品の裏側には何が見えるのか。地球規模の環境破壊は、食生活など私たちの日常と密接につながっている。</p>	17:00~19:30 9号館大教室
11月中旬 (予定)	講 演 会	<p>講師 宇井 純氏 進行 (予定) 淡路 剛久 (法学部教授) 物質的な豊かさを享受し、その結果は次世代にまかせるというのは無責任である。公害研究の第一人者が水俣に始まり世界に広がったこれまでの活動を振り返る。</p>	17:00~19:30 9号館大教室